
が～るずはんと！！

ロード 1 4 / 1 4

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

がゝるずはんと！！

【Nコード】

N8944F

【作者名】

ロード14 / 14

【あらすじ】

『ガールズハント！！』の続編が登場！！パワーアップ出来るか分かんないですけどひねくるたラブコメが遂に復活！！バカ健在、笑い健在、ラブ健在です多分。基本いっぱいいってなんで気力の続く限り頑張りますてなわけでよろしくお願いします！！

第1話：まだ一年生（前書き）

遂に続編です

わかりにくいネタもふんだんです。

全作を見てない方は回れ右して全作見てください
端っからネタバレですので

第1話：まだ一年生

「長い冬休みが……終わりました……一人きりのクリスマスも過ぎました……」

あ、ども。

如月睦月です。

気分は山下達郎のあれですね。

あ、でもクリスマスイヴは告白された日だから……過ごしたのかな？

ところで第一部では龍と付き合うことが出来ました！！

しかしその次の日には龍は健君とともに東京へ……

何故いきなり遠距離恋愛までいきますかね？

2、3個ほどステップをキングクリムゾンしたぞ！？

「あゝ、あれだ。新学期ダルいな……寒いし。まあ適当に頑張れや。ファックアップこさえたやつはぶっ壊すからな。」

鬼島先生のやってらんねえ発言により今日のショートホームルームは終了。

「まあまあ月さん！！元気出して。」

「うえゝナナちゃん……」

何故龍は帰ってこない！！

そして何故連絡がない！！

ちなみに龍の携帯はサリーとの戦いで私が壊したので一部私に原因があると言えはある！！

「こんな時は……カラオケ……」

日比野さん……

あなたって人は……

いい人だ。カラオケで龍と健のリリースした曲を歌うのだな？

私へのあてつけで。

「そうだな……カラオケだな……よし行こう！！アン・ルイス歌ってやる！！」

「「チヨイス古ッ！！」」

寒空の下、自転車を漕いでカラオケUGYAへと向かった。

懐かしきカラオケUGYA……

龍と一緒に行ったときには鬼島先生と校長とかち合って第一回カラオケ大会を開いたものだ……

いい思い出だ……。

「えゝでは私、歌います。曲はバラライカで。」

日比野さんがマイクを握り、かなりアレな歌を歌い出した。

「や・ら・な・い・か？」

あ、やっぱりそっちですかそうですね。

となりでナナちゃんも

「ウ・ハ！ー！ウ・ハ！ー！」などと合いの手を入れているしな。

「ところで健くんから連絡来たよ？」

何故ナナちゃんだけ……

「電報で。」

電報！？

今時の高校生が、電報！？
冠婚葬祭のお知らせなのか！？

「しかもモールス信号も来た。」

……凝ってるなあ……。

内容知られて困るものでも送ったのだろうか？
例えばそう……ゴリアテが動いたとかな？

「それで、電報にはなんと？」

「元気でやってるって。メチャクチャ忙しいらしいよ。」

そうか……

そんなのいいから早く帰ってきなさいって。

「すごく、すごく……大きいです……」

日比野さんの声が耳に入った。
む、やっと半分ほどか。

「しっかし二人とも凄い勢いで売れたね？」

「そうだな……まさかチャートがいきなり三位とは……チートでも使ったのだろうか？」

しかしあの二人が出した歌は良かった……
着実に売れてきているなアレは。

「やらないか……」

む、日比野さんの歌が終わったな。
次は私が。

「それでは龍と健くんへと手向けます。『怨みはらさしておくべきか』
ゴー・トゥ・DMC!!」

「相当怨んでるね。」

取り敢えず三人でコーラスして、ノドがやられたために退場を余儀
無くされた。

「ただいま……」

「お帰りなさいませ。」

家へと帰宅した私を家政婦兼姉の日和さんが迎えてくれた。

「あゝ歌いすぎてしまった……」

「ヒドい声ですね。声、掛布みたいですよ？」

確かにヒドい声だ。

だが今はそれ以上に龍に会えないのがツライ。

「おゝ睦月！！今帰りか？」

「うん……。」

父さん、今日は早いのだな。

またサボったか？

「ところで龍はどうした？最近来とらんな？テレビも出まくって、有名人になって。ま、まあまだ認めた訳じゃないんだから！！勘違いしないでよね！！」

「日和さん……アタックEを！！」

「かしこまりました掛布さん。（甲高い声で」

日和さんの勢いのついた跳び蹴り、通称マウント斗場よろしく三十二文ロケット砲が炸裂した。

凄……雇い主相手に一切の躊躇いもない……

雇い主なのに……

それと日和さん、私は掛布ではない。

「ぐあああつ！！」

吹き飛ばされた父は2、3回ほど廊下をバウンドし、障子を破る。

だが、それでもまだ父さんは立ち上がった。

「ぐふう……！！ま、まあどうしてもって……言っなら……認めてあげないことも……ないけど……？」

「ヴォルシャブニツク・カンツアーヴェガ！！」
↑技名

「やつだばあああ！！！」

私凄い……実の父親相手に一切躊躇いがない……

アタックEからは二段構えの連携技なのだ。

ちなみに技名の日本語訳は『マジシャン・セロ』。
日本語訳になっていないが。

「ぐおあああ……な、何故だ睦月……！？」

「動作の遅いパソコンくらいイラツと来たから……」

今あまり私に近寄らない方がいいぞ。
いや、正確にはあまり喋らない方がいい。
舌が飛んでも知らないからな。

「もう……寝る……日和さん、お昼ご飯はいらないです……」

一気に体力を消耗した……
歌ったせいでもあるのだが。

「そうですか……何かご入り用でしたら言ってくださいね？」

「飯に何か欲しくても俺ならお前に頼まんがな日和。弁当作るより
むしろ幻想を作るから。」

……

……

父さん、また余計なことを……

「あ、あ、あ……あ、旦那様……？コ、コキユートスへと特攻ぶっこみます
か？」

日和さん、今あなたの方からビキッて音がしたのですが？

「はっはあああ！！ごめんこうむる。」

「否、もう遅い。旦那様、あんまチヨーシくれてっとうひき肉にしてやんよ！？」

特攻の拓でも読んだかな？

その手に握られたボールは何ですかね？

「ずえい！！」

日和さんはボールの危ない方を父さんの頭へと振り下ろした。

あれは喰らったら刺さるな。

頭に。

「はっはあ！！鈍いわあ！！」

高笑いをし、華麗に日和さんとの距離を取る父さんだが、間違い無く頭にボールが刺さっている。

ほら、見たこともない血の色が。

「鈍いのは旦那様、あなたの神経でしょう。」

おっと二本目のボールが飛び出しましたね。

被害を被らないためにさっさと寝室に行くのが得策ですか。

「では頼みましたよ日和さん。出来れば被害は少なめで。」

「旦那様の脳みそ見ないのですか？」

見たくありませんな。

まき散らさない程度に片づけてください。

私は自室に戻ると鞆を机の上に放り投げた。

そして制服を無造作に脱ぎ捨てベッドにダイブする。

「龍……連絡くらいくれてもいいのに……声くらい聞かせてくれてもいいのに……」

携帯に登録された龍の番号に掛けても機械的な声が聞こえるだけ。

聞き飽きた。

龍に会いたい……

「ん……？」

ふと机の上の鞆に目をやると封筒らしきものが顔を覗かしている。

まさかラブレター！？

「ラブレターか！？まだまだ私も捨てたものではないな……！」

いそいそと手紙を手に取り差出人の確認をする。

何だろう……このドキドキ感は？
これが甘い青春！？

「いかにいかに！私には龍が！！」

と言いつつも胸は高まる。

スマン龍……私もやはり一人の女……
大体龍が私を放置するから悪いのだ。

でも大丈夫、龍が本命だから！！

私は欲求不満の団地妻か！？

心でそう呟きつつ手紙の封を開ける。

その瞬間鳴り響く轟音。

なんか……ムドオンって音がしたな。

「ン……？」

しまった！！弾みでラ、ラブレターを破いてしまった！！

ラブレター、破れたー！！

しょうもないなウン。

「まあまだ読めるからいいか。」

内容はこうだ。

私のことが好きだから、今日の昼二時来て会ってほしいと。

公園で待っていると書かれていた。

だが差出人の名前はない。

怪しいな……

行くべきか行かないべきか。

時刻は既に一時半にさしかかっている!!

「行くべきか行かないべきか!!その所をどう思うね?ナナちゃん!!」

思いあぐね導き出した答え……

それは親友の柿沼ナミに尋ねることだった。

正直自分では結論がでない。

『ぬあるほど……あなたは龍君というステッキーな彼氏が居ながら会うの？』

「ステッキーは言い過ぎだ。確かに好きだが。だが、だが！そのステッキーな彼氏は私を放置プレイだぞ！？その所をどう思うね！？」

『早い話会ってみれば？それで一回龍君を嫉妬させてみようよ。』

ほっほう、それはそれは……危ない賭ですなあ。

「嫉妬させて、龍がより一層私を大事にすると？」

『かもね。もしかしたらルミ姉さんと寄り戻すかもしれないけど。』

「……」

元も子もないだろ。

嫉妬って言つよりSHITって感じが……

『もし月さんが一人で行くのが嫌なら私も着いてくよ？』

「すまない、そうしてくれ。やはり断るにしてもシカトは出来ないからな。」

それで逆恨みされたらイヤだしな。

『じゃあその公園近くのサンクスで落ち合おうね。』

「わかった。」

私は電話を切ると簡単に身支度をし、自室を出た。

「あらお嬢様、お出かけですか？」

「ええ。少し。」

日和さんがめちゃくちゃになった部屋でグッタリとなりながら私に声を掛けた。

何故亀甲縛りされているかは敢えて聞かない。

「いやあ今週のビックリドッキリメカは凄かったですよ。」

どうやら一撃必殺技を食らったようで。

さっきのムドオンって音もこれの効果音だったというわけですね。

「では行ってきます。」

「亀甲縛りを解いてくれないお嬢様に軽く恨めしさを感じながらお送りします。」

素直に解いて欲しいと言えば良いのに……。

「……かな？」

「ん……!!」

あるえ？

今日和さんから艶のある声が……
気のせいかな？

「ここか！？」

「ちがつ……ンウ……！」

な、なんかエロい……！
そして楽しい……！

「……お嬢様、早く解いてください……！」

「わかっています。さて、次はどこを攻めればよいのか……！」

「なんか私ってM属性な気がしてきました。」

「私も今イジメたい気持ちまっくすです。」

内股にある玉結びを解いたら亀甲縛りは更に日和さんの体を締め付けた。

「はううつ……！」

「す、スマナイ日和さん……！」

な、なんて難易度の高い亀甲縛りだ……！
父さんは一体全体どうやってこんな亀甲縛りをした……？
今世紀最後のプレイボーイは伊達ではないな。

「日和さん、諦めるという手もありますが……?」

「そんな……今締め付け強すぎてサブミッション掛けられてるくらい痛いのですが……!？」

「いやぁ無理だこれを解くのは。」

「だって玉結び解いたら両鎖骨に片結びが出来上がったのだ。」

「正直、どうしようもない。」

「かれこれ十分位だろうか？」

「奮闘してみたが、どーいう仕掛けか日和さんが『宙吊り亀甲縛り改』みたいな感じになってしまっって手の施しようがない。」

「父さん、改めて怖いですあなた。」

「はぁはぁ……」

「日和さんも息が上がって痙攣してるし、体液も出している。」

「主に特定の場所から。」

「思うに日和さん……切った方が早いと思う……。」

「……はぁ……はぁ……それ採用……。」

頭弱いな私も日和さんも
じゃあ軽く切断しますか。

「…………お嬢様…………その刀は？」

「…………アヌビス神ですが？」

切れ味は保証しますよ。

「チェンジ。もっと安全そうなのありませんか？」

「モード輝彩滑刀は？」

「もうお嬢様は私をもろとも両断する気満々ですね。」

「助ける気も満々ですよ。」

ただ道具がないだけです。

もっとコンパクトサイズで何かあるといいんだが…………あ、あつた！！

「動かないでくださいね日和さん。」

「動けません。」

「ンチュアア！！」

「掛け声ダサッ！？あイタッ！！」

ウルサイですよ日和さん。
ちなみに上手く切れました。

ドサツと床に落ちた日和さんは体をくねらせて拘束から脱出した。

「ふうゝ助かりました。ちなみに何で切ったのですか？」

「コレであります。」

「な！？それは！？」

私が手にしたものは円盤形のブレード。

プレデターの武器である。

「よくこんなのありましたねゝ……プレミア物ですよ。」

「よろしければ差し上げますが？」

「これで旦那様に勝てますかね？」

「プレデターの腕を切断するくらいですから……多分。」

ただ父さんが死んだら困りますが。

「ってもう時間がない！！日和さん、私ちょっと出掛けてきます！！」

「あ、はい。いつてらっしゃいませ。」

ちよつとした罪悪感とドキドキ感。

暴走族の集会に初めて参加するようなこの感覚。

はやる気持ちを抑えて私は家を出た。

何故靴ひもが切れているのだ……？

第1話：まだ一年生（後書き）

さ、頑張るかね

実は15禁にするか迷った
性的な意味でね

嘘だよ作風は変わらないよ

第2話：ハッテン場（前書き）

もっいっぱいいっぱいクセエ……

第2話：ハッテン場

「さて……待ち合わせした通り、ここに来ましたワケですが。」

「スマンなナナちゃん。それに日比野さんまで来てくれて……」

「俄然やる気……」

何故日比野さんがやる気出す？

いやまあ相手がもし私に狼藉をはたらいた場合、助っ人がいるが……

「あ、月さんこれ。」

「何だこれ？」

「インカムです。」

逐一情報を送れと言うことか。
プライバシーもくそもないな。

「如月さん……もし……襲われそうになったら……これを……」

「日比野さん……」

渡してくれたのはロケットの形をした笛だった。

あれ？

え？

これって……

「一回吹けば私が出ます……二回吹けば柿沼さんが……三回は……
……だよ……」

「三回目は一体何が来るのだ！？マグマ大使が飛んでくるのか！？」

流石にこれは使えない。

この小説、何が起きるか全く分からないから。

それに叫んだ方が早いしな。

「では行ってくる。」

「草場の陰から見守ってるよ月さん。」

「幸運を……」

二人に見送られ私はインカムを装着して公園へと足を踏み入れた。

冬の公園は寒く、人が居ないためさらに寒さが増す気がする。

それに公園の何処に居るといふのだ!?

「うゝ……寒い寒い……」

今まだ見ぬ差出人を求めて全力疾走しているのは時雨高校のごく一般的な一年生。
強いて違ふところを挙げるとするなら彼氏がアイドルってところかな。
名前は的場龍。

そんなわけで近くにある公園に来たわけだ。

ふと見るとベンチに寄りかかるツナギを着たひとりの女性を見つけた。

ウホッ!! いい女……

そう思っていると彼女はおもむろに着ていたツナギのジッパーを下

げ始めた。

そしてこう言ったんだ。

「やらないか？」

「え……？まさかあなた……！？」

「手紙の差出人の阿部百合です。」

まさかのガチレスさんです。

インカム越しにいるナナちゃんに連絡してみた。

「ヤバいぞナナちゃん！！相手はガチレスさんだ！！」

『しばらく様子を見られたし。オーバー。』

ま、まあまだ穴だらけにされるわけじゃないから大丈夫……か……？

「よかったのホイホイ着いてきてしまつて……？私はノンケでも喰つちまうようなビッチなのよ？」

しょ、処女喪失！？

「ちょっと待ってください阿部さん！！私まだ……！！」

「嬉しいこと言ってくれるじゃないの。こうなったらとことん喜ばせてやるからな。」

聞く耳持っていない！！

全く聞く耳持っていない！！

こうなったらってどうなったらこうなったのだ！？

「いよいよヤバイよナナちゃん！！なんの滞りもなく話が進んでる！！」

『様子見様子見。何かあったら反撃しなさい。』

ど、どうすれば……

「所で私のこのパイオツを見て。こいつを見てどう思っっ。」

「すごく……大きいです……。」

さすがに私は苦笑いだ。
でも寒くないのかな？

か、帰りたい……

「ところで如月さん……私はあなたに言っておかねばならないことがある！！」

ああまだこれが果たし合いならばどんなに楽だったことが……
迷うことなく貰ったロケット形の笛を三回吹くのに……

「私は時雨高校の三年生……思えばあなたを見た瞬間、私はあなたに惚れました……」

「有り難迷惑です。」

「あなたと付き合いたい……非常識なのは承知の上です。私とアメリカで結婚してください!!」

話飛んだ!?!
すっごいすっ飛ばした!!

「あの……結婚は無理です。」

「ええ日本では無理です。しかしアメリカなら!!」
だからあなた理解力ありますか百合さん?

あと道徳観も。

「ちなみにもし断ったら?」

「火サスルート直行で。」

なんでナイフが出てくるのだ!!
あなたと私はそこまでドロドロになるほど親密な関係ではないですぞ!!

痛い人かこの先輩は!!

「ナナちゃんどうしようこの爆弾岩みたいな先輩!？」

『大丈夫。ダメージ与えなきゃメガンテしないから。』

ダメージってもう断る素振り見せちゃったのだが……

「さあ如月さん!!私と付き合ってください!!」

「断る!!」

すいませんナナちゃん、忠告マツハで無視してしまった。

「なあ……に……い……?」

えと、メガンテ一步手前まで来ました!!

メガ……みたいな感じ。

「だ、大体ですね!!私には既に彼氏が居るのです!!」

「誰!？」

言ったら龍、殺されるかもしれんな。

「言ったら……どうするつもりで?」

「簡単です。如月さんをその男から強奪します。簡単に言えば殺し

「でも奪い取る!!」

実によいロマンシングサガの発想ですな。

もはやこの狂える暴凶星を野放しには出来ない。

ラオウ在る限り、ユリアとケンシロウに安息はなかったが、今まさにそれだ。

「それは許さぬ!! 貴様言うに事欠いてヤンデレか!! 手を出してみろ、先輩とて容赦せんぞ!!」

「それはそれで望むところ!!」

ど……ドMか……!?

「それで、返事はいかに?」

「だから断る!!」

「しょうがない……ならば殺してでも奪い取る!!」

もうやだこの人。話が通じない!!
ループするしかないではないか!!

やっぱりほっとけばよかったなあ……

『月さん月さん!! ロケット笛を吹きなさい!! イカのようにしな

やかに!!」

ハトよめ?

いや待てこれを吹けと!?

「捨てて良いかな?」

『それを捨てるなんてとんでもない!!』

インカム越しからナナちゃんの声がする。

ところでこの状況が分かっているなら早く助けに出てきなさい。

「そうだいいこと思い付いた。」

な、なんですか百合先輩!!
スカートたくしあげて一体!!

「あなた私の中で小便しなさい。」

伏せ字を使えー!!
ズバッと言っんじゃない!!

あと文脈関係ないです!!

「貞操の危機か……吹くしかあるまい!!」

ぴょららららら♪

三回吹くつもりで吹いたのになんでブルースの口笛みたいになった

のだろうか……？

「本当に……助けが来るのかナナちゃん!?」

『日比野さんがホラ貝吹くとゴエモンインパクトが来るって言うよ?』

ならば最初からホラ貝をくれませんか?

それに関係ないし必要ない!!

むしろ呼んで見せてくれ。

「さあ、あなたも殺して私も死にます!!一緒にいこう、竜の巣へ!!」

待て待てい!!

さっき小便とか言ってた二の句が殺人か!?

そも竜の巣って何だ!?

一人で行けばいい!!

「これ以上は無理だ!!ナナちゃん、日比野さん、出て来て助けてくれ!!」

『こちらスネーク!!今応援部隊が到着したところだ!!』

朗報だ。

ところでその応援部隊って今私の横にいるタツキ先輩のことだろうか？

「あの……タツキ先輩……？」

「あなたが……三回笛を吹いたのね？」

三回吹いたって言うより口笛みたいな音出ましたけど……

「さあ百合……アホやってないで帰るよ。」

「アホじゃない！！こっちは真剣なの！！」

真剣になられても困るものがあります。

「はあ……いい加減男を見つけないさい。もうすぐ卒業でしょ？」

「じゃあタツキが恋人になってよ！！」

……結局この人は性欲持て余してるだけなのではないだろうか。

一目惚れしたって言ってたのに、今じゃあタツキ先輩にアタックかけている。

あ、私立場無いな。

「聞き分けないわね。いい加減にしないと怒るよ？」

「やってみそかけてみそ！！」

あ……古いCMですねー百合先輩……

「タツキ先輩……」

「…何？」

「牛君と蛙君を装備するのやめてください。」

あなた黒心祭で何やったか覚えてますか！？光学兵器使って全く……

「チャージ75%完了。」

「さらさら聞く気ありませんね。撃つ気満々ですか？」

消えますよあの人も後ろのジャングルジムも。

「100%溜まりました。」

溜まってしまいましたか……

パリパリと電磁波が発生してますが本気で撃つ気ですか？

本気で！？

「き……如月さん……」

「何ですかタツキ先輩。そんな泣きたいのかくるしいのかわからない顔して……」

「背中痒い……」

掻けと？

弾みで発射！！とかないですかね？

「早く！！このままでは暴発する！！」

なんてはた迷惑な！！

それに脅すとは！！

こっちに向いてはイケナイものが向いてます！！

「隙あり！！タツキもらった！！阿部百合容赦せんツ！！」

隙をついた阿部百合さんはナイフを握り締めて襲ってきた。

本当、我妻由乃そっくりだ。

「秋深し 隣の方は ガン マ レ イ ！！」

「や、やった！！」

発射しましたこの人！！

一片の戸惑い無く発射した！！

デイズィー張りのガンマレイが出てきましたよ？

「TKOだね。じゃ如月さん、背中掻いて。」

とりあえず仕方無く背中を掻いてあげた。

ポリポリと一通りかきむしると満足したような表情をしていた。

「あゝすつきりした。じゃあ私帰るから。」

「……………どうも……………」

えっと……………この人本当、何しに来たのだ？

ぶっ放しに来ただけか？

まあ呼んだのは私だが……………

「うぐう……………き、如月さん……………必ずや……………我が手に」

「怖ッ！！」

い、生きてた！！

形残ってる！！

てつきり消し炭になったものかと……………

「ほら帰るよ百合、あんたそろそろ卒業でしょ？レズも卒業しなよ」

「うぐうゝああ……………」

タツキ先輩は百合先輩を担ぎ歩いて行ってしまった。

よけた形跡はなかったのになんでかすり傷で済んだのだろうか？

……………不死身？

「いやゝよかったよかった。」

「もう本当に……」

「死ぬかと思ったがな。」

突如草むらから出て来たナナちゃんと日比野さんだが実際問題助けてほしかった。

「刃物持つてるのに無理できないよ……」

「日比野さん、あーたそう言いますが前作からガッツリとチェンソー振り回してたじゃないか。」

忘れたとは言わせないぞ？

ナイフ対チェンソーってヤッパなんか目じゃないのに！！

「ところで月さん」

「……何か？」

「いや、ツツコミの仕方が龍くんと被ってるなあと……」

そこは触れないでほしかった。

作者だってそこら辺を苦悩してますよ……

「まあ……何にせよ……恋とは戦争なんだね……」

「綺麗に締めたな。」

「……キレイかな？」

これで私が後ろからサクツとやられることはないわけだ。

龍がサクツとやられないとは限らないが。

まあ龍ならば奇襲くらいなんてことはないだろう。

死なないと思う。

「じゃあ私は帰る。寒いしな。」

「あゝ……月さん、今日……来て告白されて……どう思った？」

そんなもの……決まっているだろう。

形は何にせよ本気で私を思ってくれたのだ。

嬉しいに決まっているだろう。

「でも時間の無駄!!」

「……………だよね。」

その後二人と別れ暖かい我が家に帰った。

「あ、お帰りなさいませ……………」

家に入ると日和さんは縄で亀甲縛りをされた上、正固めを喰らっていた。

なんとまあテクニシャンな父だ…………

あと日和さん一つ言わねばならぬことが

一日に二度負けるバカは居らん!!

by 勇次郎

第3話：しいな（前書き）

遅れたごめんあそばせ！！

第3話：しいな

「ねえ美羽ちゃんってお兄さんいるの？」

「ほわつと？」

急に振られた話題に私は硬直した。

え？ここがどこだって？

中学校だよ、紅楠中学。
ジュニアハイスクールね。

家の兄の的場龍、その幼なじみの安達健くんが通い、楠中の最強ヤンキー伝説を作り上げたという、最悪なできたての言い伝えがある学校だ。

あ、ちなみに私は妹との的場美羽です。

覚えといてね忘れないでねマジね。

「……………いきなりなんでせう……………」

さて……ちよつ待て。

あの、私そらへんのことは内密に伏せといたんですけど……？

兄いが中二の頃が不良最盛期で、私達の学年はまだ入学してないから最悪兄いのヤンキー時代は知られてはいないわけで……

情報化社会なめてたらあかねマジで。

「まあ……いますけど？」

落ち着きなさい私、ここで敢えて兄いの存在を全否定せずに認めて、うまい具合に友達の脳裏に普通の人物ということを書り込み……もとい伝えなければ。

「あ、やっぱいたんだ？じゃあやっぱり間違いないよね？美羽のお兄さんがあの紅楠中の最強ヤンキースだったって。」

しつかりバレとるやないかい。

むしろ情報が的確すぎていじるところもない。

「だ……誰から訊いたの隣ちゃん？」

この隣ちゃんという女生徒はクラスで一番の元気を持ち、尚且つ人氣あり、ムードメーカーでもある。

「つとね、椎茄先輩。」

彼女か……。

いや、まあ彼女は兄いの一個下だから兄いが不良だったのは知っている。

それに家の兄いにゾッコンだ。ゾッコンラブだ。

余計な……事を……

「あははゝ……椎茄さんの言うとおりだよ……確かに的場龍は私の兄貴、安達健はその親友さね……だからどうした……！」

「なんでキレるの？」

確かにキレる要素はないけども……

「で、椎茄先輩から伝言で、『今度の学祭に二人を呼んでほしい』
ンだつて。」

「何である人は直に言いに来ないのかな？」

「多分気恥ずかしいものがあるんじゃない？将来の義妹にさ。」

「気恥ずかしいって……私は義妹になる気はさらさらないんだけど。」

「まあこの時期に学祭ってのもどうかと思うしね。」

「作者に言いなよ。」

そんな告訴できませんよ隣ちゃん……！

「で、いつ学祭だっけ？」

「二月十四日。」

セ、聖バレンタインにか！！

「てなわけですね、今度のバレンタインに学祭あるんだけど……」

『あ？まあ忙しいから行けたら行くわ。』

家に帰り珍しく兄いから電話が入ったため只今会話中。
今日のことを伝えておいた。

「逆だ！！むしろ来なくていいよ！！」

『ああ！？何だよ！！』

「だって兄いも健くんも有名人じゃん！！絶対騒ぎになるよ！！」

この前雑誌の表紙飾って特集ページに載ってたよね！？
椎茄先輩も持ってたから！！

スクラップノートもあつたね！！

『関係ねえだろボケ。それに俺らなんてまだまだペーペーだし、知
ってる奴なんか少数だろ。』

「ちょい待ち、楠中ヤンキー伝説作り上げたのどこのどいつだっけ
？」

『知らん！！ところで俺と健のファンって居るの？』

本当に来てほしくないなこいつ……
ガッツリ食いついてる。

「知らん！！とにかく来るな！！」

『やだ！！絶対行く！！』

ガキか私の兄貴は……そして来さしてたまるか！！

「来たらヒドいからね。」

『ほううテメエが俺にかなうと思うンか？俺が本気だしやあ一発で
泣かしてやんぜ？』

「言つてなよ。もし来たら兄いの部屋を徹子の部屋に変えてやるか

ら。」

『ヤメロ。俺を殺す気か。』

おっつと明らかに電話の向こうでトーンが若干下がったのがわかったよ。

徹子はヤバいからね徹子はボケ殺しの部屋だからね。

兄いと健くんが入ったらまずストレスで死ぬと思う。

「あゝあと椎茄先輩が会いたがってたよ。」

『あゝ椎茄な。久しぶりだな。また今度会いに行くって言うといてや。多分学祭の日は撮影入ってっから。じゃあそろそろ切るから。』

「はいうん。じゃあね。」

……そう、兄いは撮影があるのか……

絶対来るよなあこれ……

上島竜平の押すなよくらいに根拠がある。

そして学祭の前日の準備の日……私はクラスでやる喫茶店の準備をしている。

ただメイド喫茶とかではなく普通の喫茶店だ。

……残念だったな諸君！！

だが準備がなかなか終わらない。

明日学祭本番なのに何故にこんな準備が出来てないんだろうか……？

まあ頑張れば終わらないこともないけども……

だがなんの滞りもなく終わると思われた喫茶店の準備中、ある人物が私を訪ねてきた。

「やあ美羽ちゃん！！義姉ちゃんが遊びに来たずえ！！」

こ、この忙しい時に……

って誰が義姉ちゃんか!?

「あるえ? 元気ないが? どしたの?」

「椎茄先輩、今ちよつと忙しいんだけど……」

「見りゃわかるて。」

ぐ……!!

無神経……!?

件の芹沢椎茄。ちなみにこの人、スタイルがめちゃくちゃいい。胸も大きいしくびれてるし。

だがまあ何というか背が高すぎるんだよね、175センチあるらしい。

それに親が道場をやっているためケンカも強すぎるのだ。

一説によるとその拳は虎を葬り、その足刀は人を砕くという……

楠中で怒らせてはならない人だから、ある意味爆弾。

クラスのみんなも怯えている。

「でさ、龍先輩って来れるの?」

「あゝ……」

ぶっちゃけて言えば私は来るなとは言ったが……でも兄いも仕事があると言ってたし……

「やゝ……仕事で来れないって言っていましたよ。」

「あゝ……そう……か。」

う……すげえ落ち込んだ……そんなに兄いの事が好きなのか……
しかしルミさんと言い如月さんと言いなかなか兄いはプレイボーイ
だなあ。

まあツラは良いからなあ………中身はアレだけど。

「はあ……先輩……先輩……いつの間にか遠くの人になっちゃった
んだね……」

椎茄先輩は涙を流しつつファイルを取出した。

ねえ、なんでファイルがスカートの中から出てきたの？

しかもタイトルが『萌えよドラゴン』！？

頭おかしいよ絶対！！

「私はただ……遠くから見つめるだけ………」

しかも独り言……

そろそろ私も準備に戻らないといけないから正直帰ってほしい……

「あ、そう言やあ美羽ちゃん。実は織り言って頼みが……」

「はい？何でしょう？」

「龍先輩が私んところの道場いたのは知つとるよね？」

「はあ……まあ。」

兄いのあのケンカの強さの秘密は椎茄先輩の所へ通っていたからだ。

ただすぐ辞めてしまったが才能はずば抜けたものがあつたと聞く。

「非常に言いにくいんだけど……龍先輩の着てた胴着を持ってきてほしいんだよね。」

うわぁ……この人変態さんだよ……

引くわ……

「ま、まあ出来たらでいいからね！？無理しないでね？」

「無理云々以前に人としての行為かどうか考えましたか？」

「……………」

黙り決め込んだ……

椎茄先輩、異常なまでに兄いのこと愛してるなあ……

「あ、燐ちゃん！喫茶店調子どおよ？」

……………逃げよつた……………

「あ、先輩！！良かったらお客さんになつて下さいよ！！」

燐ちゃんはイスを引いて椎茄先輩を座らせた。

その瞬間、クラスにざわめきが走る。

それも当然、メニューは全く決まっていない。

というより……なんかよくわからないメニューしかないのだよ。

「これメニューです！！」

おいおいおい燐ちゃん、いつの間にメニューなんて作ったんだい？

メニューに載せれるものを作った試しがないじゃない……

「じゃあ……これにしようかな……『荒波罵鬼定食A』。頼んどいて今更だけどこれ何？」

「ありあす！！荒波罵鬼定食A一つ入りました！！」

「「「「イエッサー！！」」」」

あれ？

ホストクラブ？

「追加で闇鍋も入りました！！」

「「「「イエッサー！！」」」」

「頼んでないし！！」

ってかね、時間ないって言ってんのは何闇鍋振るってるの！？
適当に盛り合わせぶつけといて帰らせなさい！！

「はい。荒波罵鬼定食Aお待ちどお〜。」

「はへえ……？」

う……強烈な石油臭が……

そ、それに目が痛い！！

「見た目アレですが、まあググツと。」

「これ喰えと？絶対無理だがあ！！」

「でもこれ、的場先輩の得意料理ですよ？」

「イタゝダキマスッ!!」

懐かしき小学校の時の号令で椎茄先輩は荒波罵鬼に橋を刺した。

そっか……そう言えば私が風邪引いてダウンした時も荒波罵鬼とかいう不吉な単語が出たなあ……

あの時はその姿を拝むことが出来なかったが今なら見れるかもしれない。

「うつ……!!」

こゝこれはヤバイ……

見たこともない生き物(?)だ!!

近い形はそう……最も近い形を挙げるならナウシカの世界に出て来そうな巨大な虫……

甲殻類なのかな？

でもこれはアレだ、食べさせるものじゃない。

「椎茄先輩……わざわざ泣きながら食べなくても……」

「いや！！的場先輩の得意料理だもん！！食べてやる！！」

でもそれは兄いが作ったものではないですが？

そんなこと言ったらキーラ・ナイトレイが味噌カツ作るの得意と聞いて、定食屋で味噌カツ頼むようなもんじゃない。

「ウグウツ……………うつ……………エツ……………グスツ！！」

めっちゃ涙堪えてる！！

そんなに食べるのイヤなの？

イヤだよね！！

さて、やっとの事で荒波罵鬼が一口、椎茄先輩の口へと運ばれた。

それをみんな固唾を飲んで見守っている……

「むぐ……………ぐつ……………ん？……………ん……………不味……………」

「他には？」

「なんか……………ゲロみたいな……………」

全面的に販売の中止でしょこれ。

「……………不味すぎます……………」

あ、涙流れた……

あ、口から血垂れた!!

「……………帰る……………」

立ち上げれるか？

立ち上げれるのか椎茄先輩!?

足にキてそうだヨ!!

「大丈夫ですか椎茄先輩!？」

「だいじよばない……………!!」

あ、意外に余裕そうにも思えなくもない発言。

でも絶対足に来てます。

「送りましょうか……………?」

「おお我が義妹……………あ、将来の義妹……………心配ご無用……………そんな
にやわじゃないですよ……………」

誰が義妹か？

言い直さなくても義妹じゃないです。

「じゃあ……なんかスイマセンでした……うちのクラスが……」

「美羽ちゃんのせいじゃないから……道場するなら胴着を……頼むね。」

諦めてなかったのね椎茄先輩……

「あとついでに歯ブラシとか無理すかね？」

「オプション入れないでください……」

飲食店に文句付けた上にお土産奪うハングレかあんたは！！

「はは……だよね……枕で妥協する。」

「ってか早いとこ諦めてよ！！」

「残念ながら諦めって言葉は私の辞書にはないんだが！！」

前向きなのに迷惑だ。

「じゃあ明日頑張つて！！お義姉さん帰るから！！」

「はい。椎茄先輩も頑張つて。」

結局椎茄先輩には歯ブラシをあげることで妥協してもらった。

いやでも元気になるの早いね、あの人。

超・回・復・か！！

とりあえず元気になった椎茄先輩を見送った後、あることに気付いちやった私。

「闇鍋、どうすんの燐ちゃん？」

その時燐ちゃんからとんでもない一言が！！（ガチンコファイトクラブ風に

「じゃあ皆さん撤収〜!!」

「「「イエッサー!!」「「「

「仕事進んでねえだろお前ら!!」

第3話：しいな（後書き）

椎茄先輩の喋り方は名古屋弁

大阪弁みたうかないし聞いた感じで書くの苦労する

第4話・ムラマサとエリー（前書き）

遅れたぎゃらばあ!!!

第4話：ムラマサとエリー

さあやってきた学祭の日……

みんなガヤガヤと忙しく動き回って各々の仕事に励んでいる。

喫茶店は大繁盛とまでいかなくとも結構回っている。

「いやあ結構客入りはいいね〜美羽ちゃん。」

「こんなに入るとはね〜。あのメニューで……」

「いくら私でもあんな恐ろしいもの出せませんよ……」

そんな恐ろしいものを恐ろしい椎茄先輩にあなたは出したんですね。

隣ちゃん怖っ……

「さて……私ちよつと見て回ってきていいかな?」

「いいいいいよ。てなわけでハイ、これえ〜」

渡されたのは肩に掛けて前後ろに喫茶店の宣伝が書かれた看板だった。

「美羽ちゃんは可愛いからいい宣伝になるよ。」

「そ、そかな？」

「これがホントの、看板娘ってね。」

「わ！？上手くな！！！」

隣ちゃんのつまらないギャグは流しておいて私は他の出店やらを見て回ることにした。

ちなみにこの見て回ることにしたのはもう一つ理由がある。

それは兄がこの学祭に来ていないかチェックするためだ。

それにあの兄いのことだから絶対健君とも一緒にいるはず。

だから見つけ次第兄いの部屋を徹子の部屋にリフォームしてやるわ！！

「やあ美羽たん。」

美羽たん？

美羽たんって誰ぞや？

後ろから呼ばれたので振り返るとそこには椎茄先輩がいた。

「美羽たん、お兄さんは来てないのかい？」

「来てないと思います……………撮影があるとかほざいてましたから。」

実際来てるよ絶対に…………

ジョースター家がDIOが生きてると感じたように、奴が……………兄が来ているのがわかる。

分かるんだよ…………

ゴメン、嘘付いた。

気配なんて微塵も感じないや。

「ところで喫茶店は繁盛しとるかい？あのメニューまだあるの？」

「あんなん出したら管理局来ますよ……でもそこその入りですよ？」

「そつかあ、じゃあ後で私も行くね。」

まだ行く気がありますか喫茶店に。
はっ！！

まさか暴れに行くのですか！？

「大丈夫大丈夫。ちゃんと客として暴れに行くから。」

タチ悪……

まあ私としては関係ない……こともないけど。

「そつやあ椎茄先輩何やってんですか？」

「これこれ」

おお椎茄先輩も看板を……

何々……殴られ屋？

「ほら、私格闘やってるからね。一分間千円で殴りたい放題。でも私は避けるけど」

「ほえ……オアタツ！！」

「危なッ！！いきなり！！」

おお！！私の蹴りを軽く受け止めた！！

つても私は別に喧嘩強くないけど。

「いきなり何すんの！！蹴り入れてくれて！！」

「だって殴られ屋じゃないですか？」

「蹴りはないでしょうよ！！」

でも受け止めたじゃないですか……

それにデンプシーロールの動きでやる気十分じゃあないですか！？

「どけオラアツ！！」

「ぎゃはは当たつとイテエぞ！！」

あゝ……なんかこの声……聞いたこと……

後ろの人垣がモーゼの十戒のように割れて二人のヤンキーが現れた。

あれは……あの二人は兄いと健君の「コ下のドラゴン&レックスの跡継ぎと名高いコンビ」……

ムラマサと

エリー………！！

「……………」

無言で椎茄先輩が二人へと歩み寄っていった。

顔が怖い……

自然と人垣は割れていき、ムラマサとエリーの元に一本の道が出来る。

ムラマサとエリーも歩みを止めず椎茄先輩へと歩みを進めた。

「おーおー………芹沢アー！！」

「さっさとここの頭決めつかヨォー！！」

「アアン！？何吠えてンのよチビ！！視界入らないんだが！！アンタもツツパッてンなよガチホモが！！」

うわぁ……すごい喧嘩腰……
一触即発じゃない………

あ、ガチホモはエリーでチビとはムラマサのことね。

「今やるか後でやるか……？」

「後で、だ。今は仕事があるからね。」

「ゴチャゴチャメンドクセエことはやめてヨ、俺と張れやテメエ……」

180cmはあるエリーが椎茄先輩を覗き込んだ。

二人とも顔はカッコいいのに……

残念だ。
性格が悪い。

このトップに立とうとして無茶しすぎたと、椎茄先輩は言っていたが……

正に言うとおりでね。

「で？私はどっちとやりあえばいい？なんなら二人一緒でも良いよ？」

「俺とダ。二度とナメた口きけねえように歯あ全部総入れ歯に替えてヤンゼ。」

「はン！！先輩らが居なくなつて調子こきやがつて。所詮アンタらなんか偽者だよ。あの二人の跡継ぎとか言われてるけど透けかつてンよー！！」

怖い……

もう冗談抜きで怖すぎるよ……

屋上で決闘とか負けたらバンジーかな？

「じゃあな芹沢。メツキ落としたくなきゃあ逃げてもいいぜ？」

「ああ！？誰に言つてんのよこのデコボコ底辺コンビのくせにー！！」

「くく……！！クシャにしてやつからな……」

二人はまた人垣を割つてどこかへ行つてしまった。

ケンカか……

でもあの二人、ウチの兄いと暴れまわつたニトロコンビだからなあ

……

カラオケ襲撃事件にも絡んでるし……

椎茄先輩勝てるかな？

「ムラマサあ！！エリー！！二人とも替えのキンタマ用意しときなよコリアー！！」

「先輩……はしたないです……」

「ふ……ふ……絶対に落としてやる！！……あ、美羽ちゃん後でウチの店に来てよ。」

「じゃあ看板置いてから行きます。二組でしたよね？」

「二組二組。じゃ挑戦待つとるでよ。」

椎茄先輩はそう言う人と垣を割って帰っていった。

さすが楠中で怒らせてはいけない人……

自然と垣分けてるや。

「たらいまゝん」

「あ、おかえり。なんかさっき廊下騒がしかったけどなんかあったの？」

燐ちゃんが制服にエプロン姿で出てきた。

凄く……………エロカワです。

じゃなくて

「椎茄先輩とニトロコンビが衝突してた」

「椎茄先輩!？」

椎茄先輩の名を聞いて燐ちゃんの体が強張った。

え？

なんで？

昨日あんなに無礼働いたのに？

「し、しし椎茄先輩……怒ってた？私に……」

「一応……」

とりあえずこう言っとこう。

もとより後が怖いなら椎茄先輩にあんなことしなけりゃいいのに……

「し、ししし死んだかな私……？」

「殺されはしないでしょくに。」

多分。

「あ………か、帰っていいかな？」

「おいおいこらフザケンナ。働いてかんかい。」

「………そう言う美羽ちゃんはどこへ？」

「ん？椎茄先輩のところに。」

「裏切るのか……せめて私のこと取り計らってきて……」

泣き喚き嘆く燐ちゃんを無視して私は三年二組へと向かった。

殴られ屋をやっている二組はやはり人混みが多い。

だがこれは異常だ。

長蛇の列ならつゆ知らず、窓からドアからすべての人が中を見ていた。

異常過ぎる……

中にはいると我が目を疑った。

それはそうだろう。

あの椎茄先輩が……………倒れていたのだから……………

「先輩!!」

私はすぐさま先輩の元へと駆け寄る。

「先輩……………大丈夫……………ですか？」

「う……………美羽ちゃん……………ドジっちまった……………」

何カッコよく言ってますか!!
結構重傷っぽいですよ!!

「クソ……………アバラ持ってた……………（笑）」

アバラ持ってたかた（笑）じゃないですよあなた!!
笑ってる場合じゃないです!!

「だ……………誰に!？」

「蹴り一発……………この私が蹴り一発でオシヤカにされちゃったよ……………」

そ、それは相当な化け物ですな……………

この椎茄先輩を一撃で……………

「殴られ屋をやってるのにやられたら……………面目立たないよね……………ゴ
フッ!」

ちなみに今の『ゴフッ!』で血は出てませんよ。

ただ咳込んだだけだよ。

「やっぱり兄妹だね……………」

「何が……………」

「殴られ屋って書いてあるのに蹴りを入れてきた当たりが……………」

……………あるえ?

まさかこれはまさかまさか!?

「まさか先輩……………」

「うん……………変装してたけどあれは龍先輩だったよ……………」

る〜るる
♪

るるるる
♪るるるる
♪

るるる
♪

るるるるる
♪

徹子の部屋にリフォーム決定

第4話：ムラマサとエリー（後書き）

龍「あ、グループ名何にしよう？」

健「オリジナル・プランクスターは？」

鈴「いや、ホットペッパー団にしよう」

龍「お前ホットペッパー団はあかんやろ」

鈴「ホットペッパー団にしようって」

健「オリジナル・プランクスターでええんちゃうかなあ」

鈴「ホットペッパー団！！」

第5話・おらにゃん（前書き）

すっぱー遅れた

つぎはやくしたいです

第5話・おらにゃん

「調子はどうですか？」

「うゝ……相当痛い」

私は椎茄先輩を保健室のベッドに横たわらせた。
確かにつらそうだ。

だがそれ以上にこの椎茄先輩を一撃で沈めるなんて……兄い、改めてあんたはここの伝説なんだと思い知ったよ。

「これじゃああの二人との決着は無理ですね」

椎茄先輩は放課後、ムラマサとエリーとの決戦を控えているが今の状態じゃ無理だ。

まず潰されるとみて間違いない。

「は？は？戦わない？いやいや美羽ちゃん、それこそ無理な話だよ。私はあいつらと決着を着ける。もうこの戦いはそんなとこまで来てるんだ。卒業する前にね、決着を着ける。」

わからないな……私にはそんな意地になる理由がわからない。
そのまま卒業すればいいのに。

「ところで美羽たん？」

「何ですかね先輩？」

うあああ……ニヤンとしたその笑み、家の兄とか健くんがよく見せてた……

「龍先輩は居ないかな？私……こうなっちゃったし……龍先輩のお陰で……これじゃあハンデだよ、龍先輩のお陰で……！！」

うわああ……その遠回しのようで露骨な要求ウゼエ……

つまり兄いを連れてこいと？

この学祭の中から？

「イタタタ……わ、脇腹が……もう龍先輩以外にお嫁の行く宛がない……」

……ト、トドメ刺していいかなあ……？

今なら勝てそうな気がするんだけど……！！

いいよね！？

「あ、美羽ちゃんそう言えば私にウソついたよね？龍先輩は来ない
つて。」

「はて？そんなこと言いましたかのぉ？」

「ボケるには早い。ちなみに私にウソついた罰は重い。もうひと思
いに言うけど、龍先輩を連れてきて！！」

うわ！？

い、今気迫で風が吹いてきた！！

それほどの執念とは……！！

「私ね、龍先輩が好きなの！！大好きなの！！だからお願い、会わ
せて！！」

な、なんで今更恋する乙女に……！？

あなたつい十分前くらいにはキンタマ用意しとけとか乙女にあるま
じき発言してましたよね！？

「わかりました……会わせましょう。探しましょう。あなたには負
けました。」

私とて鬼ではない。

恋する乙女が居る以上、応援してあげたいのは乙女の性。

今私のこと乙女じゃねえだろと思った奴、夜道では背後に気を付けないさ。

「ありがとう……私ここで寝てるから。」

「果報は寝て待て、ですか。いい気なもんです。」

保健室を後にした私は廊下で一人考えていた。

まずは兄いを見つけないと。
私的にも恨みがあるし。

「どうやって見つけるか……多分変装してるだろうし、かと言って

校内放送使ってバレたら厄介だし……」

「お困りのようじゃのー!!」

「げえっ!! 老師!! じゃなかった燐ちゃん!!」

いつの間にか背後には燐ちゃんが。

仕事は？

ねえ仕事はどうしたの!?

「さてさて仕事は任せといたから安心して遊べるよ!! そして何かお悩みのようだね美羽ちゃん!!」

「はぁ……まぁ……困ってるっちゃあ困ってる。」

ただしこれは人には話せないことだ。

だが燐ちゃんなら……いや無理かもしれない。

一応聞いてみるかな……スッゴい変化球で。

「ねえ……燐ちゃんさ、この学祭で見たことあるなあって人店に来た? もしくは見た?」

「あ、それならモデルの龍と健っぽい人がいたような。」

な、た、どんだけ、どんだけ変装してないねん!!

まかりなりにも有名人なんだからそこら辺はちゃんとおさえとけ!!

「まさか……本物……！？」

「まさかぁ。」

無駄なところで汚れてますな。

「そしてまさか龍と健はこの学校の卒業生である、伝説のドラゴンとレックス！？」

「まさかぁ！？」

いやいや、まさしくその通りですよ隣ちゃん。

君はいつの間にそんな知ってはいけないことばかり知るようになったんだい？

「こうしちゃいられない！！今から校内放送号外じゃあ！！流せ、流せ、流せ、流せ！！ヘーイ！！」

「落ち着いて隣ちゃん！！」

私は隣ちゃんの奇行をおさえるべくタックルして、やむなくば気絶させるくらいのタックルをして捕まえようとした。

だが隣ちゃんはすでにジャガーノート。

誰にも止められなかった。

「キャホホのホーイ!!」

「あかん……隣ちゃんが暴走した!!」

このままでは、このままでは兄たちが見つかってしまう!!

いやそれはそれで、ならばよし!! なんと私が先に見つけないと!!

多分兄は私のクラスの喫茶店にいる可能性が高い!!

考えられるのはそこしか

ピンポンパンポン

『ウルエディース、アーン、ジエントルマーン！！え、みなさまコンニチワ。本日は楠中学校祭におこしいいただき、あ、誠にありがとうございます。早速ですが、本題です。え、今この学校に、モデルの龍と健が居るとの情報が入りました。みなさま周りの人物を見てそれらしい方がいましたらそれ多分アタリだヨ！！奮ってお探しくださーい！！』

ピンポンパンポーン

ちくしょおおお！！

何やってんだよおおおおおお隣ちゃんよおおお！！

これじゃ早く見つけないと兄いを椎茄先輩に渡すのが遅れるじゃんかアア！！

クソ！！

やられた！！

この時の私は多分夜神月みたいな顔をしてるのだろうね。

いやそれよりもまずは兄いの確保だ。

絶対に、喫茶店にいるはず！！

確かな確信もないまま、私は自分のクラスへと駆け出した。

さて、教室に着いてみたが兄いらしき人物は誰もいない。

感づかれた？

いやまさか。

変装していてもわかる人にはわかる程度だと思っし、見付かれば当然人も集まっていると思う。

周りの人達も凄い必死に、特に女の子とかは筆舌にしがたい勢いで搜している。

いやね、一つ言わせてもらつとそんな必死になつて搜す価値のある人物じゃないから二人とも。

ピンポーンパンポーン

『調子はどうですかエビバデー!!見つかりましたか!?!?』

ちい……諸悪の根源め……！！

『言い忘れていましたが二人を見つけ次第………ワッ！？何だあなた達は！！やめ………あ！？あなた！！アッー！！』

え！？

何事！？

今放送室で一体何が！？

『ガッ………ガゴ………マイク入ってるこれ………？入ってる？………あゝテストス。ンゝども、みんなの捜すドラゴンです。』

あ、兄いか！！

『ただいま放送室をジャックしまし、た！！ここにいる女子のせいで美羽どころかみんなに正体がバレたためいつそ開き直って放送室

ジャックしちゃいました。時間もないので手短に言います。ヒマな奴は体育館に来なさい！！以上！！』

あゝ……隣ちゃん捕まったか……
兄い、私の名前出すな！！

『気張ってるかいみんな！！レックスだよン！！また今度CD出すかもだから、買ってなゝ！！じゃあ、さよゝなりゝ。』

ピンポンパンポン

宣伝すなッ！！

まさか兄いがあんな暴挙に出るとは……

だがまあこれで二人の場所が分かったわけだ。

体育館で待ち伏せしていればいいわけだ。

大人しく捕まってくれるかどうか問題だけど。

行動を起こさないよりはマシなはず。

ってなわけで体育館にレッツラドン！！ドレミファドン！！

移動が多すぎるのは気のせいですかね？

体育館にたどり着くとそこには人……人……人……一つ飛ばして人の海！！

どうやらドラゴンとレックスは楠中では有名なようだ。

いきなりチャート三位というのもあるけど、結構雑誌の表紙を飾ることもあるからなあ……

体育館では

「早く二人に会いたい!!」とか
「サイン欲しい!!」などの声が所々で聞こえてくる。

主に女子から。

「おゝおスゲー人気だな俺ら」

「テンション上がるわ」

「……………二人ともさ、何気なくはなしかけてくるのやめてよ」

背後にはいつの間にか問題話題の二人がいた。

その、なんて言うか、普通に会っちゃったよって感じに。
だがこれで目的は達せられた。

「兄い、今から私に付いてきて」

「なんで？」

「椎茄先輩が会いたいわって」

「民事不介入だ!!」

民事って……まだ事件じゃないんだけど。

ちなみにこの二人はまだ体育館のみんなにはバレてはいない。

「いいから早く!!」兄いが椎茄先輩潰すから今椎茄先輩寝込んでン

だよ!？」

「あゝやっぱりな龍。な？俺が言ったとおりだ。やっぱり骨折れたんだよアレ。変な音したもん。」

「結構いい感触だったからな。カエルみたいな声出してたし。」

「出してた出してた。」

兄いと健くんが何故最強とか呼ばれていたか今わかった。

この人ら重傷を負ったり負けたりするのが当たり前みたいに感じてる!!

恐怖感がない、ある意味キレた二人だ……!!

「ま、とりあえず見舞いに行くべ。」

「ンだんだ。」

兄いの提案に賛同した健くんと一緒に二人は保健室へと向かう。

私は後ろをちょこちょこ着いていくのだがいい加減疲れてきたよ。

「ところで兄い、燐ちゃんどした？あの放送室にいた子。」

「亀甲縛りで放置プレイ。」

「そしてキャッチアンドリリース。」

卑猥な……！？

「はあ………龍先輩………」

今保健室のドアの前で隙間から中の様子を覗いてるんだけど、非常に入りにくい。

だってなんか兄いの名前を呟きながらベッドの中でうごめいてるもの。
ベッドが少し軋んでももの！！

「……兄い、これ入っちゃう？」

恐る恐る聞くと兄いはさも当たり前のようにドアに手をかけた。

「龍行っちゃう？あれどうみても自慰だろ？」

「かと言ってあいつがイクまでデバガメしてみる。あいつの妄想の中で俺がどれだけ汚されることか、目の前で見るとだぜ。」

一理ある。

見る限りどんどん盛り上がってるようだし。

「だから俺は行く。静かにな。」

そうやって静かに忍び寄るあたり兄いの性格の悪さが伺えるなあ。

いつそいきなり入ってきましたよって入ればいいのに。

「ン……ッ！！悔しい……でも感じちゃう……！！」

盛り上がってますなあ。

今椎茄シアターでは椎茄先輩が受けなのかな？

あ、今のイッた！！

イキましたね！！

「よお椎茄、ゴクローサン。ハッピーか？」

「……………どもっス……………」

急に背後からかけられた声に椎茄先輩、顔すっげい赤いや。

「なぐにやってたんだよ？ン？」

「うう……………」

「ナニしてたんだよな？」

「言わないでほしいっス……………」

あ、ちょっと今のその反応カワイイっス。

「美羽に聞いたけどお前、俺に会いたかったそうじゃねえか。どうした？」

「いや、あの……………非常に言いにくいンですけど、龍先輩にやられて今すっげー痛いンですよ」

「そいつぁ災難だったな。」

あ、兄い謝る気サラサラ無いっすね！！

椎茄先輩も少し『えっ?』って顔してるし。

「ま、まあそこんところは置いてですね。……………ムラマサとエリー……………あいつらの事、知ってますか?」

「知ってるも何も、後輩だろが。」

「そうじゃなくて……………あの二人、先輩らが居なくなっただけに相当無茶してるんですよ。カツアゲとか色々……………」

そう言えばあの二人、兄い達が居るときは全然悪い噂聞かなかったけど兄い達が卒業してからはろくでもない噂ばっか聞くな。

「何?あいつらそんなに悪やってンのか?」

「ン……………私はあの二人からはいい噂聞かないな……………」

健君が聞いてきたので私はそう答えた。

「あいつら、ドラゴンとレックスの跡継ぎみたいに言われてるみたいですけどどう見ても違う。私はね、龍先輩。今回のケンカである二人を完璧に完膚無きまでに叩き潰して、叩き潰してあいつらを抑えるつもりだったんですよ!」

「何で俺にキレてんだよ。殴られ屋やってたのはお前だが。」

「でも先輩蹴り入れましたよね？」

どっちが悪いのかなこれ……？

端から見たら兄い劣勢だ。

「じゃあ何だ？俺にあいつらを……矯正しろってか？」

「まあそうなりますね。先輩のせいで戦えなくなりましたので。」

すげえ……あの兄い相手に駆け引きとは。

「お前よ……あんましナメたこと吹いてンじゃねえ。なんならテメエ、その鼻に一発ブチ込んでよ、陥没させてやってもいいンだぜ？」

静かなトーンだが口調がスツゴい荒い。

あまりそんな兄いを見たことがなかったため、改めて怖いと思った。

いつもヘラヘラしてる兄いとも、テレビで見た兄いとも違う。

「私は……先輩、私は正直言えば頭なんか興味ないンですよ。あいっつらトバして、抑えられるンなら頭なんかなくなつたてならなくなつたていいンですよ。」

「……………」

「これ以上楠中の看板汚したくないし迷惑もかけたくないから。だから先輩」

「じゃあー!!」

「ぐ、うつ…………!!」

なッ!? 兄い、なんで椎茄先輩の鳩尾に!?

「健、先に体育館行つといて。あと美羽、拡声器二つ持ってきていてや。」

「お前はどうすんだ?」

「出来の悪い後輩シバきに。」

あ、やっぱ行くんだ。

何やかんやで行くんだ。

我が兄は盛大なツンデレだ。

「負けンなよ。」

「五分くらいで戻ってくんわ。」

兄いはニヤリと笑うと保健室から出て行き、健君はそれを見送ると正反対の方向にある体育館へと向かった。

「……全く、全く以て素直じゃない兄いだ。でも良かったですね椎茄先輩。」

「……………」

「椎茄先輩？」

返事がない。

ただの屍のようだ。

いやいやそれはないにしても、兄いに同じ感じの攻撃喰らったから気絶を……

「椎加先輩！？大丈夫ですか！？椎加先ぱ

.....死んでる.....」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8944f/>

が～るずはんと！！

2010年10月9日19時08分発行